



道総研

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和7年度 第2号 2025年11月28日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和7年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（2次調査）結果

函館水試調査船「金星丸」および釧路水試「北辰丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2025年11月14～20日（沖底漁獲物調査は11月26日）
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深100～600mの海域

- ・ 渡島～胆振海域におけるスケトウダラの海域平均反応量は、前年同期を下回った（前年比60%）。
- ・ 魚群反応の強い海域は昨年度と同様、日高沖に偏ってみられた。
- ・ スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～600mにみられ、特に海底に張り付いた反応は水深450～500m前後にみられた。
- ・ 渡島沖で行ったトロール調査の結果、採集されたスケトウダラは尾叉長35～50cmの成魚が主体であった。
- ・ 水温は、渡島沖では水深300～400mにかけて、胆振沖では水深250～350mにかけて平年よりも1～2℃高かった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島から日高海域にかけて観察されましたが、その中でも日高沖の162漁区に比較的強い魚群反応がありました（図1・2）。
2. 渡島沖から胆振沖にかけての平均反応量は、前年同期を下回り、調査を開始した2001年以降の最低値となりました（図3）。ただし、日高沖（S～T線）には昨年度同様、比較的強い魚群反応がみられたことから（図1）、今後、この魚群が渡島～胆振沖の産卵場に移動してくる考えられます。
3. スケトウダラ成魚とみられる魚群反応は、水深400～600mに観察されましたが、漁獲対象になる海底に張り付いた魚群反応は水深450～500mが中心となっていました（図2）。なお、近年（特に2020年以降）の11月における分布水深は350m以深となっており、それ以前と比べ分布層が深くなっていました（図4）。
4. 渡島沖（D線沖の水深430m付近）でトロールによる漁獲調査を実施した結果、採集されたスケトウダラは尾叉長35～50cmの成魚が主体となっていました。昨年、一昨年の調査では、尾叉長45cm前後の大型魚の割合が高かったのですが、今年度は尾叉長35～40cmの小型個体の割合が増加していました。なお、昨年のトロール調査でスケトウダラと同程度（重量比で）採集されたソコダラの仲間（主にテナガダラ）は、今年の調査ではあまり採集されませんでした（重量比で5%未満）。
5. 調査海域の水温は、渡島沖（D線沖）、胆振沖（H線沖）ともに、表層から水深250m付近にかけてはほぼ平年（2002～2024年のこの調査における平均値）並みとなっていました。渡島沖の水深300～400mおよび胆振沖の水深250～350mでは平年を1～2℃上回っていました（図6）。特に水深350m付近では両地点とも水温4℃を上回っており、観測開始以降における最高値となりました。

なお、次の調査は12月下旬（12月22～26日）を予定しています（今年度は金星丸上架検査の期間が早まったことから、調査も例年より早まります）。調査後にまたスケトウダラニュースを発行して、分布状況等をお知らせします。

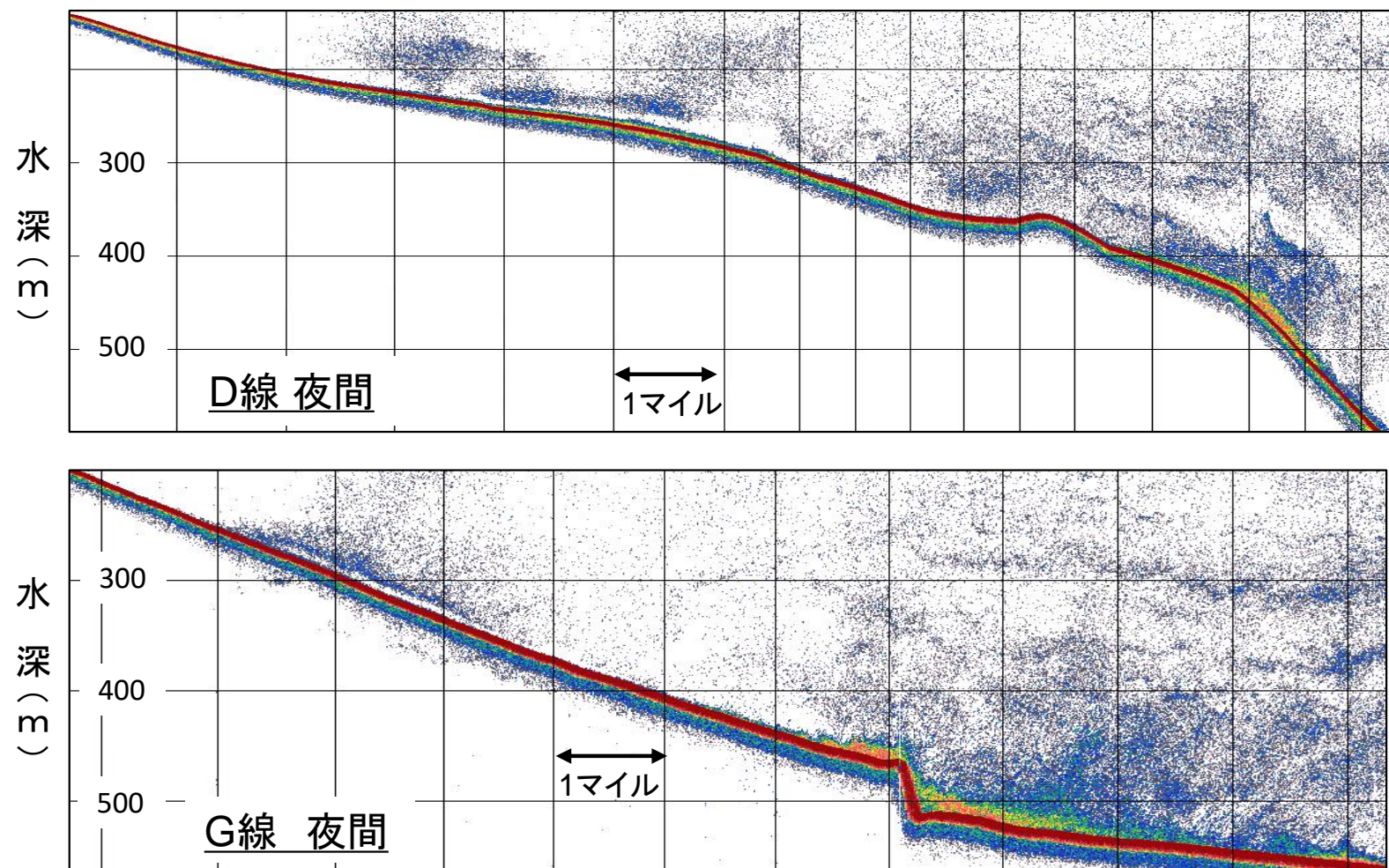
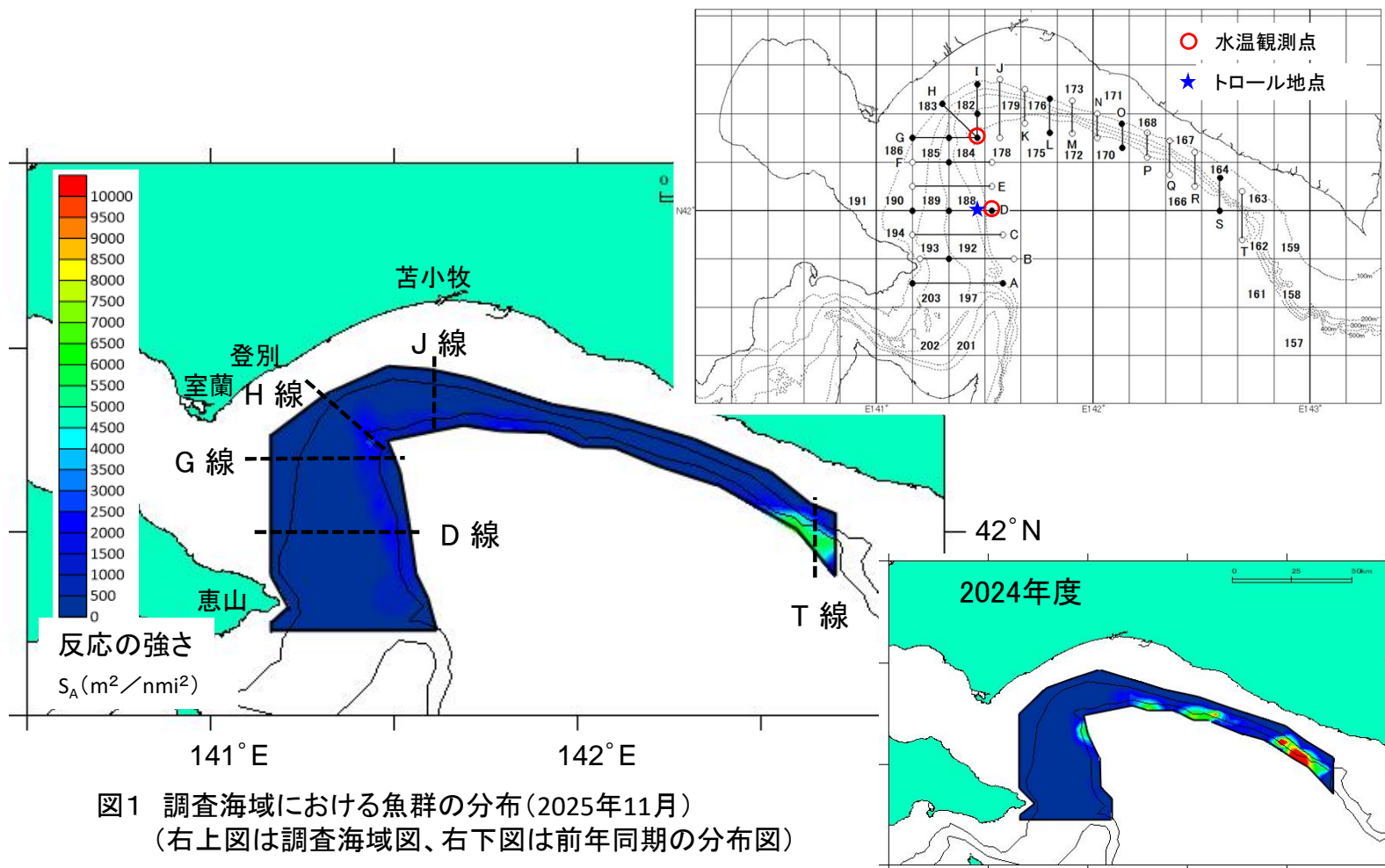


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

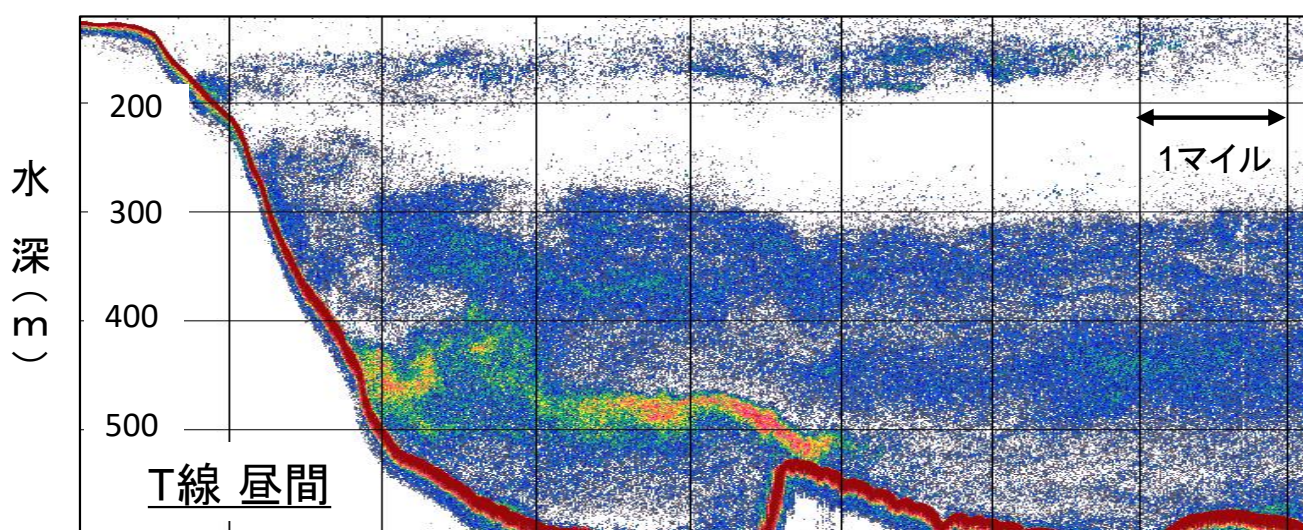
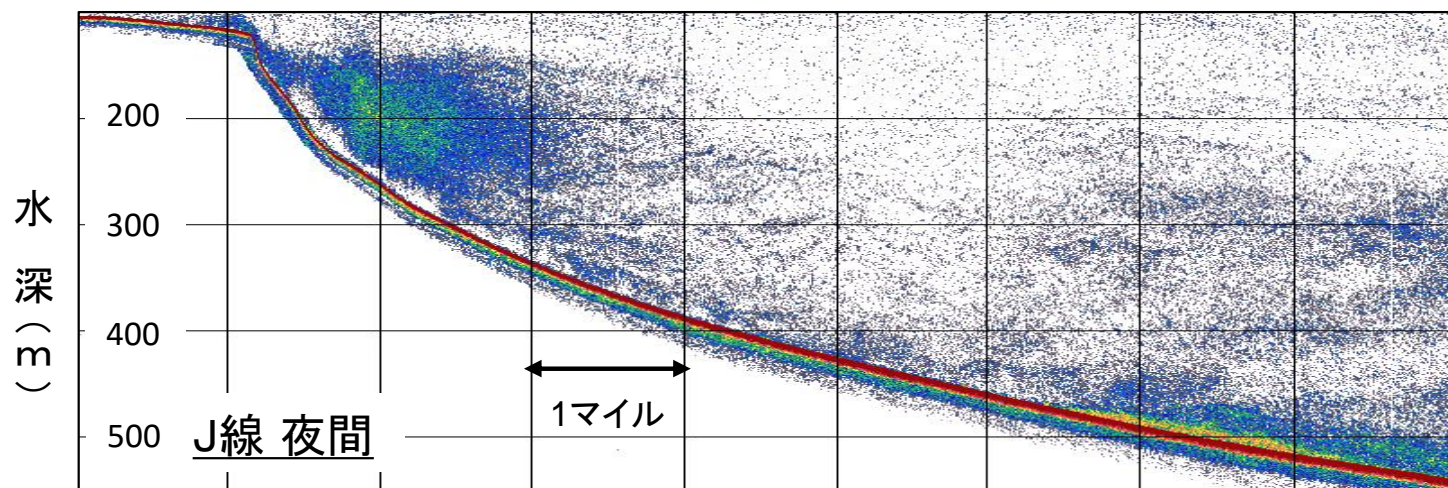
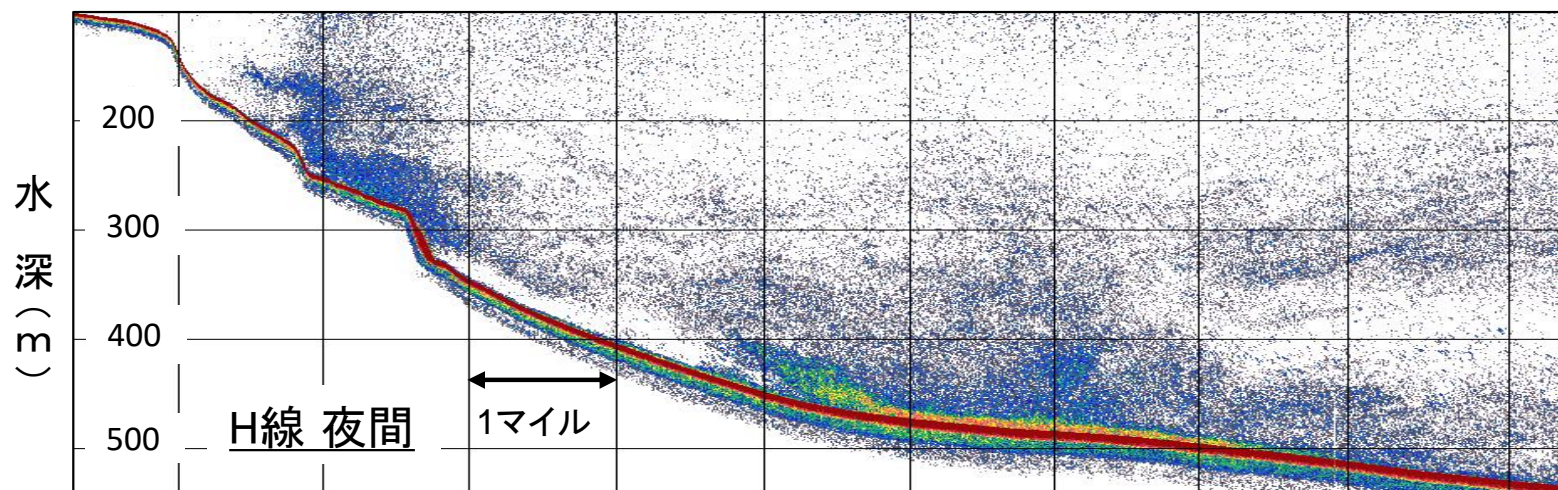


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

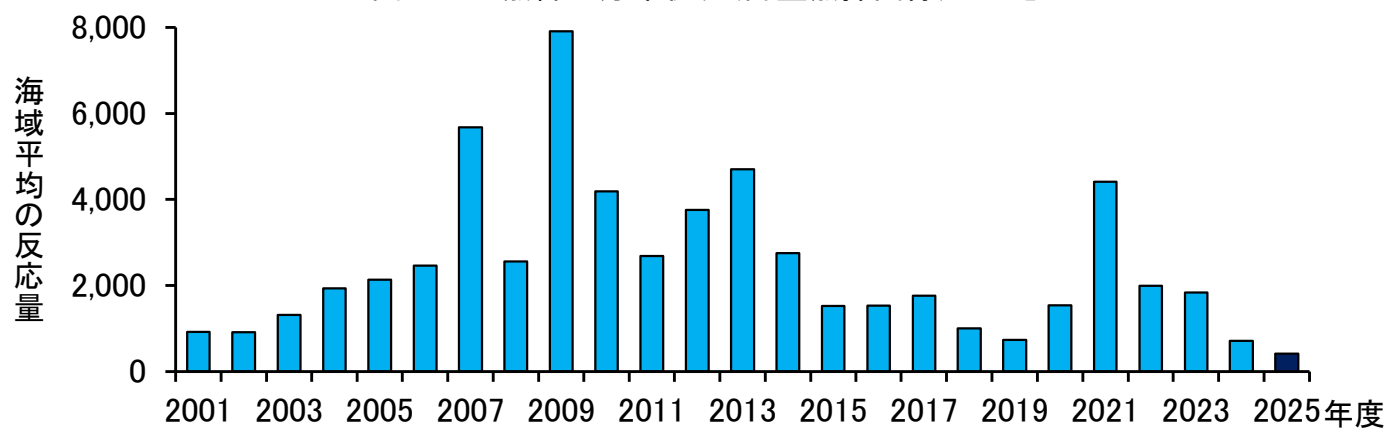


図3 調査海域におけるスケトウダラ魚探反応量の推移(1平方マイルあたりの反応量)

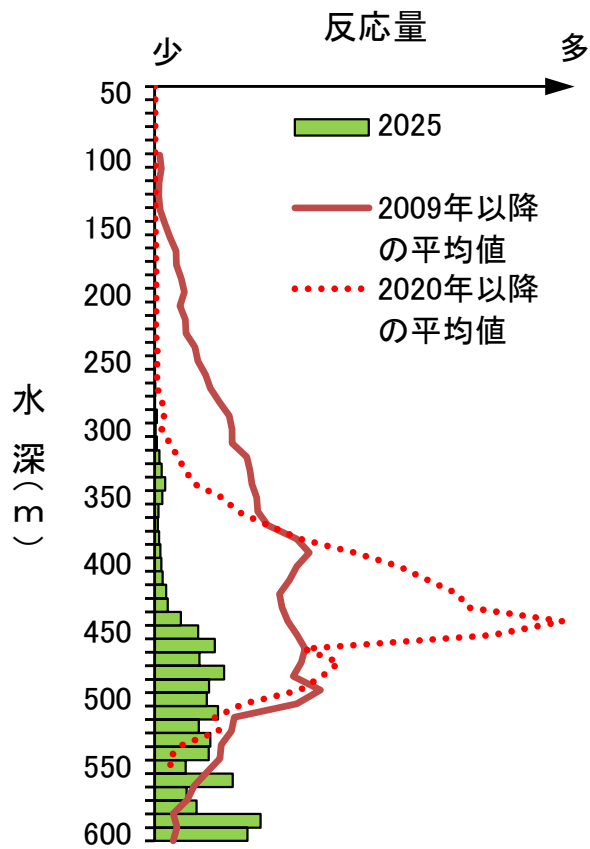


図4 水深別の平均魚探反応量(海域全体)

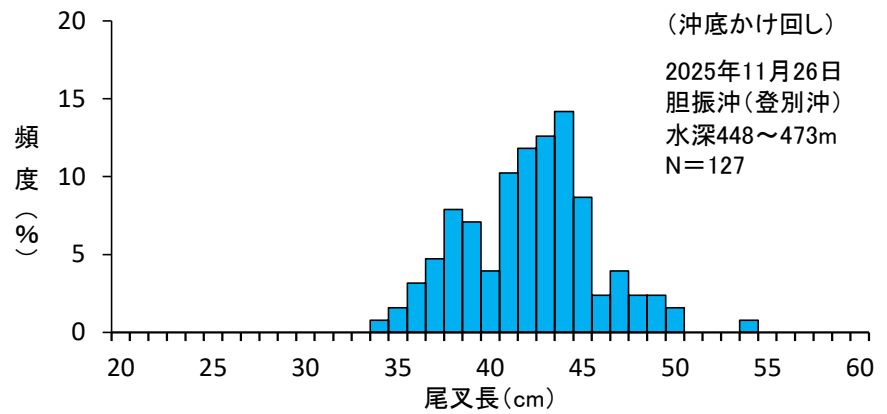
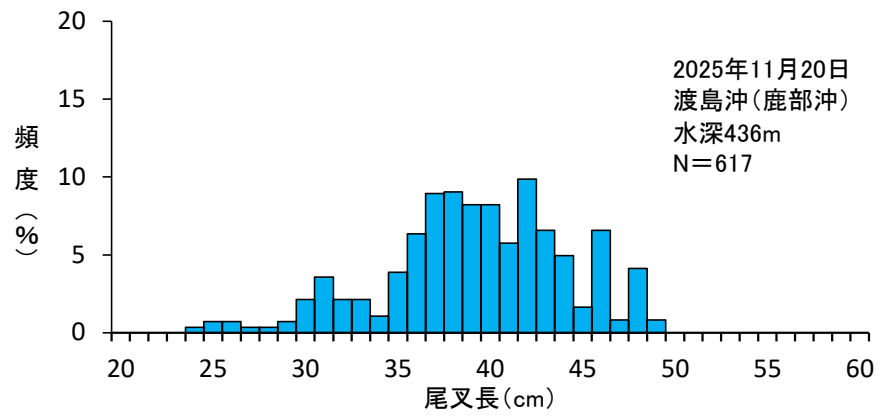


図5 スケトウダラ漁獲物の体長組成
(上: 渡島沖, 下: 登別沖)

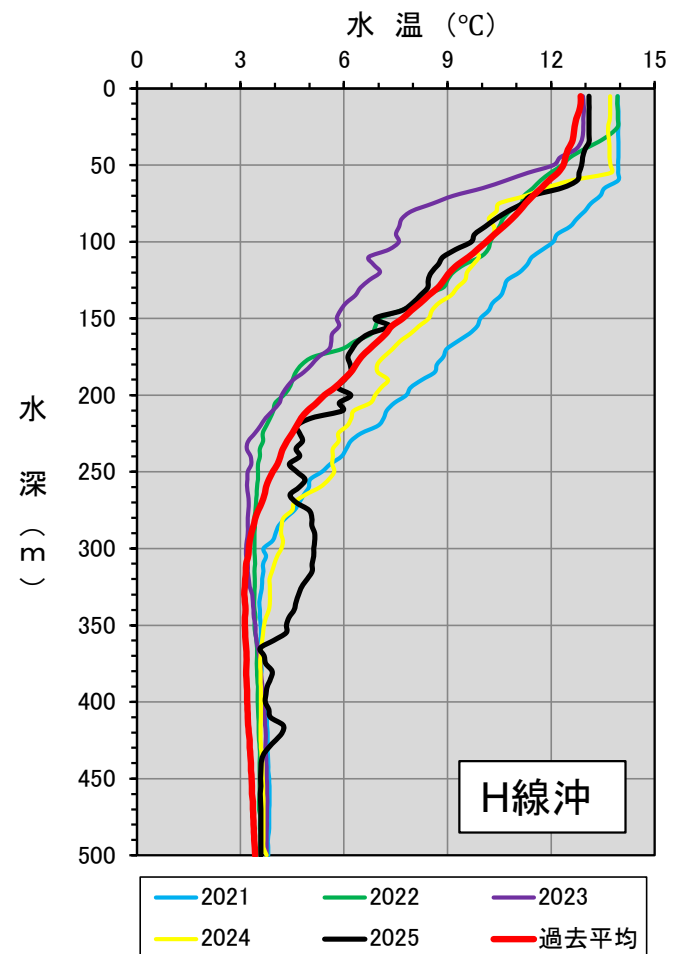
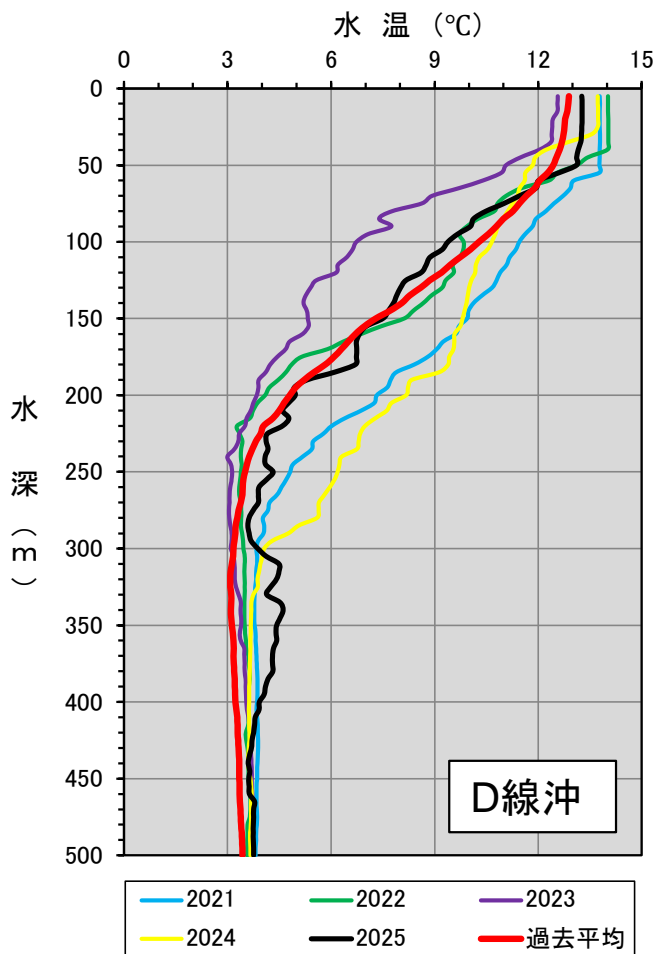


図6 11月中旬における水温の鉛直分布 左: Dライン沖(N42° ライン), 右: Hライン沖(登別沖)
(過去平均: 本調査における2002~2024年度のそれぞれの調査点の平均値)

※この調査の一部は、水産資源調査・評価推進委託事業により実施しました。